

## Corneille の «Sophonisbe»

村 瀬 延 哉

### (1)

Corneille の «Sophonisbe» は、1663年1月に Hôtel de Bourgogne 座で初演された。かねてから作者に恨みを持っていた d'Aubignac は、この上演を契機に、Corneille 批判を開始する。他方、文壇における影響力という点で、圧倒的に優勢にあった Corneille の陣営でも、Donneau de Visé などによって、反撃が試みられる。しかし、いずれにしろ、d'Aubignac の私恨に基づくところの大きいこの論争では、演劇理論上の収穫はなかったと言わざるを得ない<sup>1)</sup>。

«Sophonisbe» は、d'Aubignac によって非難される理由の一つにもなったが、1634年に上演された Mairet の «La Sophonisbe» と同一テーマを扱っている。Mairet の作品は、三一一致の規則を守った最初の悲劇として、演劇史に記憶されている。と同時に、当時の観客の人気を集めるのにも成功し、悲劇流行のきっかけとなった。

これに対し、Corneille の «Sophonisbe» は、人気という観点からすれば、決して成功作ではなかった。このことは、d'Aubignac の証言を待つまでもなく<sup>2)</sup>、その後の上演記録を調べれば明らかであろう。1680年から1920年までの間に、Comédie-Française で上演された Corneille の22の作品のうち、「Sophonisbe」は最も上演回数が少なく、わずかに2回を数えるにすぎない。因に、「Sophonisbe」の前作 «Sertorius」は84回上演されている。この傾向は17世紀中から既に顕著であって、1680年から1715年の間に宮中で上演された Corneille 劇のリストに、「Sophonisbe」は含まれていない。「Sophonisbe」を傑作と賞讃した人物は、文学史上17世紀の Saint-Evremond が思い浮ぶだけである。また、今世紀になって多くの Corneille 批評が発表されたが、この作品を高く評価しているのは、Doubrovsky 以外見当らない<sup>3)</sup>。

しかし、「Sophonisbe」が人氣的に失敗作であるとしても、ただちに鑑賞に値しない作品と速断してはなるまい。では、この作品の興味はどのあたりにあるか。

主人公の Sophonisbe は、いかにも Corneille 好みの女傑である。祖国愛、名誉を楯に、強大なローマの圧力に屈することを潔しとしない。ところが、この正義と不屈の精神を体現するきわめて Corneille 的な英雄が、以前の傑作時代の主人公のように、読者の共感を呼ばない。それは、彼女が超人的な意志の持主で、並の読者とかけ離れた存在であるというだけの理由ではない。彼女の掲げるもっともらしい大義名分の背後に、彼女独自の欲望と打算が働いていることを、Sophonisbe は隠さないからである。

そして、読者を最も驚かすのは、この乖離に対し、彼女が何らの慙慚の念も感じていないことである。この怜悯な打算家は、罪の意識に対してだけは、恐しく鈍感である。大義とその内実の乖離といったことは、彼女にとって、良心の逡巡の理由とならない。現代人の目から見れば、彼女は、英雄の仮面をつけた偽善者なのだが、この偽善という観念が全く欠落しているところに、彼女の不思議さがある。

«Le Cid» から «Polyeucte» に至る傑作期の英雄に対し、「La Mort de Pompée»以降徐々に進行する英雄の変貌を問題とする時、Sophonisbe は、確かに、その興味深い一例となろう。英雄の頹廢が、恐らく作者は無意識のうちに、女主人公によって見事に表現されているからである。

Syphax, Massinisse という男性主要人物についても、Corneille 劇特有の理想化の桎梏を免れている。彼らにあっては、かくあるべしという倫理の規制が弱まり、主として欲望だけが、行動の規準となる。

以下、我々は、三人の主要人物の言動を、Corneille 劇における理想の崩壊という観点から検討していく。本論に入る前に、「Sophonisbe」の粗筋を紹介しておきたい。

## (2)

舞台は、紀元前3世紀の北アフリカ Numidie 国の首都 Cyrthe。戦火を交えてきた Numidie とローマの間に和平が成立しそうな気配である。しかし、Numidie の女王 Sophonisbe は、和平に賛成でない。カルタゴ人の

Sophonisbe は、現在の夫 Syphax と結婚する以前、Numidie を二分するもう一人の王 Massinisse と恋仲であった。だが、ローマと敵対するカルタゴが、Syphax を味方につけようとする政略の犠牲になり、二人の仲を裂かれる。祖国愛に燃える彼女は、この犠牲を喜んで引受けた。一方、領土を Syphax に奪われた Massinisse は、今ローマ軍と共に Cyrthe 攻略の先頭に立っている。

溺愛する妻に説得された老王 Syphax は、死を覚悟で、ローマとの戦闘を決意する（一幕）。

Cyrthe の宮殿は、Gétulie の女王 Eryxe が囚われている。かつて、彼女は、放浪の Massinisse を保護し、結婚を望むようになっていた。Massinisse が Cyrthe を攻略すれば、彼女の自由と恋の望みは同時に叶えられるはずである。

戦闘はローマの勝利に終り、Syphax は捕虜となる。だが、Massinisse と再会した Eryxe は絶望する。彼が愛しているのは Sophonisbe であった。彼は、ローマに引渡さぬ代償として、自分とただちに結婚するよう Sophonisbe に求める。彼女も、結婚後もローマを憎む自由を認めてくれるならという条件をつけて、同意する（2幕）。

Eryxe は、愛する者を奪われた恨みを用意深く表に出さないが、Sophonisbe はいち速く、嫉妬を見抜く。そして、彼女や前夫 Syphax の復讐を回避するためにも、Massinisse 自身が、二人の結婚をローマに通告すべきだと判断する。

一方、妻と面会を許された Syphax は、彼女の裏切を知って、激しい絶望と怒りに囚われる。これに対し、Sophonisbe は、死して王の名誉を守らなかった Syphax の不甲斐なさを糾弾し、自己の行為を正当化する（3幕）。

Massinisse は、Sophonisbe の示唆に従って、Scipion の副官で、ローマ軍を指揮する Lélius に会い、彼女を妻とする正当な権利を主張するが、反対に、恋にのぼせた軽卒な振舞を非難される。

この時、Lélius の陣に Scipion が到着する。彼と直々に面談する前に、Massinisse は、Sophonisbe に最後の別れを告げる。だが、この期に及んでも、彼女は、愛の感情に溺れることを潔しとしない。逆に、彼女の夫となった以上、彼女がローマの地を踏まずにすむようにするのが、Massinisse の務めだと強い口調で説く（4幕）。

Scipion との会見は、予想通り失敗に終る。Massinisse は、彼女と再会を禁じられ、明日にも戦地に赴くよう命じられる。この知らせを伝えた Massinisse の部下は、同時に主人からのことづけ物として、自決用の毒薬を Sophonisbe に渡そうとする。しかし、彼女は送り物を突き返す。そして、Eryxe を呼んで、Massinisse を返すと告げる共に、かねて用意の毒薬を飲んで死ぬ（5幕）。

## (3)

Sophonisbe は、己の行動を、その並はずれた祖国愛によって説明しようとする。しかし、Stegmann も指摘する通り、彼女の言動の多くは、Massinisse を巡って、彼女がライバル Eryxe へ示す激しい嫉妬を抜きにしては、理解できない。

L'intrigue de la curieuse tragédie de *Sophonisbe*, apparemment dévouée au culte de la patrie et de la liberté, repose en fait surtout sur une vengeance de jalousie.<sup>4)</sup>

(«ソフォニスブ」という興味深い悲劇の筋立は、見かけは祖国と自由の礼賛に注がれているようだが、実は就中嫉妬による報復から成立っている。)

順を追って、検討してみよう。

ローマと Numidie の間に和平が成立しそうになった時、彼女は夫を説得して、武器をとらせる。彼女に、戦闘を選ばせた理由は何か。

まず、ローマ軍を破る可能性があること。<sup>5)</sup>勝てば、カルタゴにとって利益である。しかし、彼女の冷静な計算は、このような単純な愛国心の段階にとどまらない。仮にローマが勝ったとしても、敵の将軍 Massinisse は、彼女のかつての恋人である。恋する者の心理からして、己を裏切った Sophonisbe を、彼は必ず許し、彼女の力となるであろう。Syphax との結婚の経緯から判断して、彼女はこの点に揺らぎない確信を持っている。<sup>6)</sup>

さらに秘められた第三の理由。和平は、Massinisse と Eryxe の婚姻を成立させる。彼女の嫉妬心は、この結婚を容認できない。

Ce reste ne va point à regretter sa perte, ... Mais il est assez fort pour devenir jaloux / De celle dont la paix le doit faire l'époux.<sup>7)</sup>

([恋の] この残り火も、恋人を失ったことを後悔するまでには到らない。…しかし、それは、和平によって彼を夫とするはずの女性に嫉妬するには十分である。)

なぜなら、Sophonisbe の関知しないところで成立する二人の結婚は、Massinisse が、もはや彼女の影響下でないこと、彼女の魅力をきれいさっぱり忘れさって、別の女性と新たな関係に入ることを意味するからだ。自分が相手を愛さなくなっても、相手からはいつまでも愛されていなければならない。驕慢な Sophonisbe の自尊心は、そう命ずる。<sup>8)</sup>

次の一幕三場で、Sophonisbe がカルタゴへの忠誠を楯に、Syphax に戦闘を勧める場面では、いかように愛国心の美辞麗句で飾られていようと、今述べた真の動機を粉飾する口実と考えねばならない。

二幕三場で、Sophonisbe は、Massinisse の求婚に応じる。動機の第一は、彼への愛。<sup>9)</sup> 第二は、夫となった Massinisse をいずれカルタゴの陣営に引きこめると判断したから。<sup>10)</sup> そして、第三には、ここでも Eryxe への対抗心が、重要な動機となっている。

Mais c'en est une ici bien autre, et sans égale, / D'enlever, et si tôt, ce prince à ma rivale, / De lui faire tomber le triomphe des mains, / Et prendre sa conquête aux yeux de ses Romains.<sup>11)</sup>

(しかし、こんなにも早く、恋仇からあの殿下を奪いとり、彼女の掌中より輝しい勝利を失わせ、ローマ人の眼前で彼女が我がものとした男性をさらうのは、もう一つの比類ない喜びなのです。)

つまり、一幕においても二幕においても、Sophonisbe の判断は、同一の三つの要因の上に成り立っている。カルタゴの利益を守ること。Massinisse との愛。Eryxe へのライバル意識。この中で、どの感情が意志決定に最も深く関与しているか。

嫉妬と恋愛感情では、一見して、嫉妬の方が女主人公の意志決定に重要な役割を果している。少くとも、Massinisse への愛情については、それをコントロールする自制心を備えているが、Eryxe に関することになると、彼女は己の嫉妬心に抗する術を見失ってしまうようだ。

既に引用した「[恋の] この残り火も、恋人を失ったことを後悔するまでには到らない。…しかし、それは、和平によって彼を夫とするはずの女性を嫉妬するには十分である。」という一節が、その一例だろう。さらに五幕一場の Sophonisbe の告白が、この事実を何より証明している。

Massinisse との結婚が、ローマの許しを得られぬとほぼ明らかになった時、彼女は、性急に結婚にふみきって、返って立場を不利にしたのではないかと反省する。もし、こんな形で結婚していなかったら、Massinisse は、ローマの攻撃からもっと巧みに Sophonisbe を守れたかもしれない。彼女にしては珍しいこの計算違いはどこから生れたか。Massinisse と同様、止み難い恋愛の感情に促されたからではない。

Ce n'était point l'amour qui la (= avidité) rendait égale; / c'était la folle ardeur de braver ma rivale; / J'en faisais mon suprême et mon unique bien: / Tous les cœurs ont leur faible, et c'était là le mien. / La présence d'Eryxe aujourd'hui m'a perdue; / Je me serais sans elle un peu mieux défendue;<sup>12)</sup>

(結婚の) 願望が、[彼と] 同じように強かったのは、恋のせいではない。恋仇に負けまいとする気狂いじみた情熱のせいだ。それこそ、私にとっての最上、唯一の幸福だった。人の心は、みな弱点を持っているが、私のはそれだった。エリックスの存在が、今日私を破滅させた。彼女がいなければ、もう少しうまく身を守っていただろう。)

ライバル心は、死の瞬間まで止むことはない。自殺する時でさえ、わざわざ Eryxe を呼びつけ、例の毒薬をことづけた Massinisse の手紙を読ませる。そして、彼を喜んで返すが、それはこのような卑劣な男に未練がなくなったからにすぎないと、さんざん Eryxe の恋人を貶めると同時に、己の気丈さを誇示する。<sup>13)</sup>

※ ※ ※

次に、Sophonisbe の祖国愛は、彼女の行動を決定する因子として、どの程度の重要性を持っているのか。確かに、彼女は、祖国とか名誉とかいう言葉を頻繁に口にする。Sophonisbe の行動は、一見こうした高尚な動機に基いているように見える。たとえば、Massinisse への恋心を退けるために、

Quelle bassesse d'âme! ô ma gloire! ô Carthage! / Faut-il qu'avec vous deux un homme la partage<sup>14)</sup>?

(なんと卑しい心根だろう! ああ、私の名誉よ! ああ、カルタゴよ! 一人の男が、お前達二人と、この心を分ち合って良いものだろうか。) と叫ぶ。

しかし、彼女のカルタゴへの愛、裏返していうならローマへの憎しみは、

彼女自身の利害と、密接につながっている。ローマの奴隷となること、ローマへ連行されて、凱旋式の晒者にされることの恐怖である。彼女の口にする名誉心および自由である誇りは、文字通り奴隷の屈辱を免れることと表裏一体をなしている。<sup>15)</sup>

従って、このような個人的利害のレベルを越えた、もう少し次元の高い愛国心を仮定する時、Sophonisbe が果して愛国心に従って行動したと言えるかどうか疑わしい。

たとえば、先に触れた Massinisse との結婚。この決断には、彼女の言葉を信じるなら、彼をカルタゴ陣営にひき入れるという愛国心が、重大な役割を担っているはずであった。しかし、その結果は先に見た通りで、彼女自身が、嫉妬に駆られた計算違いと認めざるをえなかった。つまり、彼女は、カルタゴの利益を擁護するために必要な冷静さより、嫉妬の感情の方に強く動かされたと考えられよう。

※ ※ ※

以上の観点は、後ほど引用するが、ローマ的美徳の権化として女主人公を賞讃した作者に較べて、エゴイスト、打算家 Sophonisbe の側面を強調した嫌いがあるかも知れない。しかし、現代の読者の目には、Corneille の女主人公は、作者が述べる理想的人物とは到底映らない。嫌悪すべきとまではいかないにしても、読者の神経をきしらせる、決して共感を呼ぶことのない人物である。確かに、我々は、Sophonisbe を見て、驚嘆させられる。しかし、それは多少皮肉な意味を交えてである。この鉄面皮、エゴイスムを美辞麗句に飾って、とことんまで主張しながら、少しも臆するところのない態度。これこそは、我々の及びもつかぬ点であり、一種の強さと言うなら強さに違いない。

ともあれ、「Sophonisbe」の興味は、この己が欲望を貫徹して、罪の意識に怯むことのない超人的女性と、彼女にふりまわされる二人の男性——共に愛欲の感情に溺れやすいが、だからといって、愛する女性にどこまでも忠実という訳ではない、卑劣さ、弱さを十分に持ち合わせた人物——の織りなす、欲望の人間模様にある。

## (4)

Joseph Marthan は、Sophonisbe と Syphax の関係を、sadisme および masochisme によって説明する<sup>16)</sup>。我々は、安易に精神分析学の概念に頼ることを警戒しよう。しかし、二人の関係が、憐みとか罪悪感とかを持たぬ、ひたすら攻撃的な女性と、自分は愛される資格がないという固定観念に囚われた、言わば弱い男性の組合せからなっていることは否定できない。

Syphax の弱みは、年齢にある。一体、彼が何才なのかは、「灰色の髪」<sup>17)</sup> や「しわのいった額」<sup>18)</sup> というセリフ、老境にあることを認めている点<sup>19)</sup>、作者の分身としての要素が強いことなどを考慮して、想像するしかない。若い女性に本気で愛されるはずがないというコンプレックスのせいで、彼は、ひたすら Sophonisbe の言いなりになり、盲目的に仕える。

Que c'est un imbécile et sévère esclavage / Que celui d'un époux sur  
le penchant de l'âge, / Quand sous un front ridé qu'on a droit de haïr  
/ Il croit se faire aimer à force d'obéir<sup>20)</sup> !

(老年にさしかかって、額にしわが入り、嫌われて当然のくせに、[妻の] 言いなりになれば、愛されると信じている夫の盲従とは、何と馬鹿々々しくて、むごたらしいものだろうか。)

Sophonisbe が自分を愛していないと分かっていても、彼女の意に添うために、王位と王国を危険にさらすのである。<sup>21)</sup>

三幕六場は、Marthan も指摘する通り<sup>22)</sup>、劇中最も興味深い場面となっている。Sophonisbe の勧めに従ったばかりに、捕虜となった Syphax は、彼女が、勝者の Massinisse を袖にしても、自分への貞節を守ったと錯覚し、無邪気に喜びを表明する。

Je ne vous dirai point aussi que vos conseils / M'ont fait choir de ce  
rang si cher à nos pareils, ... Puisqu'en vain Massinisse attaque votre  
foi, / Je règne dans votre âme, et c'est assez pour moi.<sup>23)</sup>

(それ故私は、貴女の進言のせいで、我々にとって非常に大切なこの地位から転落したとは言いますまい…マシニスが、貴女に横恋慕してもどうにもならなかった。私は貴女の心に君臨しています。私にはそれで十分です。)

しかし、実はこの時、Sophonisbe は Massinisse と結婚の儀式を終えたばかりであった。一種残酷なイロニーがこの場を支配している。Sopho-

nisbe は、本来の猛々しさをむき出しにして、己の裏切を正当化する。彼女の名誉は、ローマの捕虜とならぬこと、女王の座にとどまることによって守られるのであって、敗軍の将である夫に貞節を守ることによってではない。何ら悪びれるところもなく口にされる弱肉強食の思想を前にして、Sypfax の驚きと怒りは真に当然であろう。<sup>24)</sup>

だが、彼にも非難を免れない点がある。戦場より生還するのは勝利した時という約束を破り、縛目の恥を妻の前にさらしたからである。

Et je saurai pour vous vaincre, ou mourir en roi.<sup>25)</sup>

(私は貴女のために戦勝するか、さもなければ王として死ぬことを心得ている。)

さらに、妻が自分の許に戻る可能性がないと悟ると、この恋する老人は、一転して Sophonisbe とカルタゴの破滅を願う。Lélius に向って、我身の不甲斐なさを嘆き、彼女と Massinisse の結婚がローマにもたらす危険を切々と説く。己の恨みを晴らしてくれるなら、不倶戴天の敵の裾にすがって、助けを求めることも厭わない。

Mais, pour peu de pouvoir qu'elle ait sur son courage, / Ce vainqueur avec elle épousera Carthage: ... Je le hais fortement, mais non pas à l'égal / Des murs que ma perfide eut pour séjour natal. ... Vengez-moi de Carthage avant qu'il se déclare<sup>26)</sup> :

(しかし、彼女が少しでも彼の心を支配しているなら、この征服者は、彼女と一緒にカルタゴとも結婚することになるだろう…私は、彼を強く憎んでいる。だが、私を裏切った女の生国にある城壁ほどにはない…彼が立場を明らかにする前に、カルタゴを倒して私の復讐をしてほしい。)

王の尊厳も誇りもかなぐり捨てたかのような彼の振舞いは、欲望にとりつかれた者の愚さを示して余りある。

## (5)

Corneille は、「Au Lecteur」で、Massinisse が妻に毒薬を送る代りに、軍隊を率いて Scipion に反乱を企てるケースを仮定している。

J'accorde [que] ... Massinisse devait ... s'attaquer à la personne de

Scipion, se faire blesser par ses gardes, et tout percé de leurs coups, venir rendre les derniers soupirs aux pieds de cette princesse: C'eût été un amant parfait, mais ce n'eût pas été Massinisse.<sup>27)</sup>

(私は、マシニスガシピオンに立ち向って、彼の衛兵に負傷させられ、刃を全身に受けながら、戻って来て女王の足許で息をひきとるべきだったと認める。しかし、その場合、恋人としては完璧であったろうが、マシニスではなくなってしまう。)

つまり作者は、Massinisse の理想化を拒否し、恋に熱しやすいが同時にさめやすい、史実に近い人物を再現しようとした。このため、かなり卑劣で身勝手な人物として描かれている。

たとえば、Eryxe から Sophonisbe に心変わりする際、詭弁を弄して、責任を Eryxe になすりつけようとする。Syphax に王国を奪われた Massinisse は、Eryxe にかくまわれ、彼女の援助を得て、Syphax を破ることができた。Massinisse を戦地に遣ったのは、Eryxe にしてみれば、彼の身の危険を軽んじたからではない。名前だけの王では、民衆に侮られるから、結婚前に相応の所領と権力を得させたいと願ったのである。<sup>28)</sup>ところが、Massinisse は、女王の真意を故意に曲解して、彼女の援助は、領土拡張の野心のためだったと決めつける。

Dites-moi donc, madame, aimez-vous ma personne, / Ou le pompeux éclat d'une double couronne?<sup>29)</sup>

(姫、一体貴女は、私という人間を愛していられたのか。あるいは、二つの王冠の壮麗な輝きに魅せられたのか。)

そして、Syphax を破って、責任を果たしたのだから、誰と結婚しようと、後は自分の自由だと主張する。

毒薬を Sophonisbe に送った Massinisse は、彼女から手きびしい皮肉を浴る。それ以前に彼女は、夫たる者の義務として、彼女がローマのカピトリウム地を見ることがないようにと要求していた。<sup>30)</sup> Scipion に結婚を許されなかったのも、彼は、義務を履行するため、彼女に自決を勧めた。彼女の非難は、Syphax に対する場合と同じである。我身かわいさの余り、命を捨て損った男、王としての誇りよりも、ローマの奴隷としてあるいは傀儡として生き存らえる方を選んだ男、どうして彼は、Sophonisbe に毒薬を送る際に、自らの命を断たなかったのか。

Mais, s'il m'aimait encore, il me devait l'exemple: / Plus esclave en

son camp que je ne suis ici, / Il devait de son sort prendre même souci.<sup>31)</sup>

(でも、彼がまだ私を愛しているのなら、私にその範をたれるべきでした。ここにいる私より、戦陣にいて彼は、なお奴隷の身の上なのですから、自分の運命について同じく心を配る必要があったのです。)

Mairet や Voltaire の Massinisse は、愛に殉じ、Sophonisbe と共に自決して果てた。Corneille の Massinisse は、妻を死に到らしめ、妻から卑劣な男の烙印を押されたまま、Scipion の命を受けて、戦場へ赴いていく。

## (6)

以上検討した如く、Corneille の「Sophonisbe」には、本当の意味でのヒーローは存在しない。三人の主要人物は、何らかの形で、読者の反発、軽蔑を誘う。

確かに一面から言えば、これは作者の人間観や現実観察の深化に基因しているのだろう。Rodrigue や Auguste のような理想的英雄、打算に心を曇らすことのない純粹無垢な人物の創造は、好むと好まざるにかかわらず、晩年の作者には不可能になっていた。しかし、一つ奇妙なことがある。作者が、Tite-Live の史実を引合いに出しながら、自作の Sophonisbe に与えた賞讃である。

vous y verrez Sophonisbe avec le même attachement aux intérêts de son pays, et la même haine pour Rome qu'il lui attribue. ... Elle en fait son unique bonheur, et en soutient la gloire avec une fierté si noble et si élevée, que Lélius<sup>32)</sup> est contraint d'avouer lui-même qu'elle méritait d'être née Romaine.

(ここでもソフォニスピスが、彼 [= Tite-Live] が描いたと同じように祖国の利益に愛着を示し、ローマを憎んでいるのが分るだろう…彼女はそれ [= 祖国愛とローマ憎悪] を唯一の幸福とし、その名誉をかくも高貴で、高められた誇りの念によって守ったので、レリウス自身が、彼女はローマ人として生れるに値したと認めざるを得なかった。)

しかし、その「高貴な誇り」の故に、「ローマ人として生れるに値した」

と作者が評する Sophonisbe と、我々が見てきた女主人公の間には、大きなギャップが存在する。このギャップは、作者の意識、観念と、彼が実際に創造したものの間のギャップである。簡単に言えば、作者の意識では、かつて大当りをとった英雄達と同一系列の理想の人物を創造している積りが、恐らく作者の人生経験のせいでもっと陰影のある人物になってしまった。エゴイズムや虚栄心といった、本来の英雄達なら、抑圧されるべき感情が、随所に顔をのぞかせ、祖国愛や名誉などという大義を利用して、自分の欲望を満そうとする。その意味で、Sophonisbe は英雄のカリカチュール、英雄の振りをした偽善者、しかし自分が偽善者と気づいていない偽善者と言えよう。

«Sophonisbe» は、体験や知識の増大が、芸術的天才の発展と比例しない、むしろ逆行することがあるという一例と言えなくもない。しかし、このことは、何度も繰返すように、この作品の興味を否定するものではない。典雅な言葉使いの陰で、登場人物は、人間の抱く最も原始的で、強烈な感情—権力欲、愛欲や嫉妬、屈辱、死の恐怖など—に苛まれている。彼らは、己が欲望を満すために、ありったけの才智と力を駆使して戦うが、誰一人として望みを果さない。そして最後には、愛を口にしながら、裏切り裏切られた者の孤独と、死に臨んで敗北を認めぬ女主人公の虚勢の呼びだけが残る。

この劇は、欲望につかれた人間の愚さを教えてくれるのだろうか。あるいは、たとえそれがどれほど愚しかろうと、己が願望をまっとうしようとして全力を尽した者のみが有する満足の感情、一種のカタルシスの感情を我々に伝えるのであろうか。

[注]

- 1) Cf. G. Couton: *La Vieillesse de Corneille*, Maloine, 1949, p. 46.
- 2) Cf. A. Adam: *Histoire de la littérature française au XVII<sup>e</sup> siècle*, del Duca, 1968, t. 4, p. 205.
- 3) Cf. J. Marthan: *Le Vieillard amoureux dans l'œuvre cornélienne*, Nizet, 1979, pp. 132–133.
- 4) A. Stegmann: *L'Héroïsme cornélien*, Armand Colin, 1968, t. 2, p. 527.
- 5) Cf. *Sophonisbe*, I, 2, 57–58.
- 6) Cf. *ibid.*, 59–74.
- 7) *Ibid.*, 87, 89–90.

- 8) Cf. *ibid.*, 135–139.
- 9) Cf. *ibid.*, II, 4, 709–710.
- 10) Cf. *ibid.*, 715–716.
- 11) *Ibid.*, 711–714.
- 12) *Ibid.*, V, 1, 1545–1550.
- 13) Cf. *ibid.*, 1557–1560, V, 4, 1659–1666.
- 14) *Ibid.*, V, 1, 1533–1534.
- 15) Cf. *ibid.*, III, 4, 1015–1017, 1107–1108.
- 16) Cf. J. Marthan, *op. cit.*, p. 140, p.149.
- 17) *Sophonisbe*, IV, 2, 1199.
- 18) *Ibid.*, 1195.
- 19) Cf. *ibid.*, 1185.
- 20) *Ibid.*, 1193–1196.
- 21) Cf. *ibid.*, I, 4.
- 22) Cf. J. Mathan, *op. cit.*, p.138.
- 23) *Sophonisbe*, III, 4, 1003–1004, 1007–1008.
- 24) Cf. *ibid.*, 1025–1032.
- 25) *Ibid.*, I, 4, 386.
- 26) *Ibid.*, IV, 2, 1221–1222, 1251–1252, 1258.
- 27) P. Corneille: *Théâtre complet de Corneille*, Garnier, 1971, t. 3, p. 231.
- 28) Cf. *Sophonisbe*, II, 1, 488–498.
- 29) *Ibid.*, III, 2, 829–830.
- 30) Cf. *ibid.*, IV, 5, 1449–1456.
- 31) *Ibid.*, V, 2, 1600–1602.
- 32) P. Corneille, *op. cit.*, t. 3, p. 230.

## *Sophonisbe* de Corneille

Nobuya MURASE

En 1663, Corneille donna à l'Hôtel de Bourgogne une tragédie intitulée *Sophonisbe*. Mais la pièce ne parut pas obtenir de succès, puisqu'elle n'eut que peu de représentations.

Le dramaturge a eu l'intention de présenter une Carthaginoise fière qui sacrifie aux intérêts de son pays *"toutes les tendresses de son cœur, Massinisse, Syphax, sa propre vie"*. C'est pour cela, continue-t-il, que Lélius, consul romain, est lui-même contraint d'avouer *"qu'elle méritait d'être née Romaine"*.

En réalité, la *Sophonisbe* de Corneille n'est pas si patriote qu'il le prétend, car ses sacrifices ne proviennent pas forcément de son patriotisme. Quand elle préfère la guerre avec Rome à la paix, ou quand elle épouse Massinisse, quels sont les vrais mobiles de ses actions? Elle en énumère toujours trois: les intérêts de Carthage, l'amour pour Massinisse, la jalousie à l'égard d'Eryxe, fiancée de Massinisse. Mais ces trois motifs ont-ils pour elle la même valeur?

Vers la fin de la pièce, elle se demande pourquoi elle s'est pressée de se marier, ce qui a accéléré sa ruine. Ce n'était ni l'amour ni le patriotisme qui lui ont fait commettre une erreur de cette taille. *"C'était, dit-elle, la folle ardeur de braver ma rivale. J'en faisais mon suprême et mon unique bien. Tous les cœurs ont leur faible, et c'était là le mien"*.

Comme l'indique Stegmann, l'intrigue de *Sophonisbe*, *"apparemment dévouée au culte de la patrie et de la liberté, repose en fait surtout sur une vengeance de jalousie."* On peut imputer l'échec de la pièce au personnage même de l'héroïne remplie de jalousie, dans une certaine mesure hypocrite, et qui n'inspire pas la sympathie. En ce sens, l'admiration que Corneille éprouve pour elle n'est pas justifiée. Et il est très surprenant de constater l'ampleur du décalage entre le personnage tel qu'il a été créé et l'idée que s'en faisait le dramaturge.